



図8 1号住居跡



図7 遺跡の位置
5万分1地形図「新津」

平遺跡 秋葉区小口

平遺跡は、新津丘陵の東側縁辺部が最も張り出した台地状部分の端部に立地する縄文時代の遺跡である。遺跡の範囲は、南北七〇メートル、東西六〇メートルほどと推定される。標高は一五〇メートルで、西から東に向かって緩やかに傾斜している。遺跡から東へ一〇〇メートル余りを能代川が流れている。

昭和五十六（一九八一）年に、個人の住宅建築に伴って新津市教育委員会が二二三平方メートルを発掘調査した。その結果、縄文時代中期初頭から前葉（約五〇〇〇年前）と、後期初頭から中葉（約四〇〇〇年前）の二時期にわたる集落跡であることが分かった。発見された主な遺構は、堅穴住居跡が二棟、貯蔵穴と考えられる土坑が一基であった。遺物は約二万一〇〇〇点の縄文土器のほか、土錘・土版・土偶などの土製品、石鏃・石匙・石錘・磨製石斧・打製石斧・凹石・磨石・石皿などの石器と各種にわたっていた。また、黒曜石に酷似する黒色石英の原石も認められ、この原石は新津丘陵産と推定された。

堅穴住居は二棟とも台地の縁の斜面につくられ、一棟が中期前葉、



図9 土偶の頭部片 左の幅約6センチメートル
縄文時代後期



図10 土錘状の土製品 1号住居跡出土
長さ約6センチメートル

らは、ここで暮らしていた人々が、漁労具と推定される石錘、狩猟具の石鏃、土掘り具と推定される打製石斧、ドングリやヤマイモなどを加工する磨石・石皿など、様々な道具を使って食料を得ていたことが想像できる。また、土偶・土版などからは、まじないや遊び心を持っていたことが想像できる。

もう一棟が後期前葉の住居跡であった。このうち後期前葉の一号住居跡がほぼ完全な形で発掘された。一号住居跡は斜面を段状に造成した上に構築されたもので、床面は南北三・六メートル、東西四・二メートルの円形である。斜面の上方に当たる部分には、幅数十センチメートルの高い段と溝が半周している。雨降りのときの排水の役割のほか、物置にも使えるこの段状の施設は、斜面に竪穴住居をつくる際の工夫と思われる。炉は、床の一部を浅く窪めただけの地

床^{しやう}炉^ろが、二つ設けられていた。

平遺跡では調査範囲が狭いものの多量の遺物が出土した。遺物か